

平成23年度 課外授業講師派遣 活動レポート

第1回 南砺市立井口中学校

4月19日(火)、片山浩一氏(片山商事㈱代表取締役)が南砺市立井口中学校において、全学年40名を前に、「将来の夢」と題して課外授業を行った。

片山代表は、小学生の頃、富山市の大きく立派な陸上競技場を見て感動し、将来この競技場で走りたいという夢を持ち、高校生でそれが実現できたことや、中学生の頃、旅行好きで、探検家を目指し与論島へ一人で出掛けた時に苦労を乗り越え目標達成できた自身の体験を紹介した。

こうした若い頃に挑戦し達成できた経験が現在の仕事にも大いに役に立っているとし、「夢を持ち、目標を立てることで実力以上の力が発揮できる」と論じた。

また、「親や他人に言われるからではなく、積極的に自分でやりたいことを見つけ出しほしい。中学校の勉強は最低限基本的に学ぶべきことが詰まっており、今しっかり学ぶことが必要不可欠である」と訴えた。

さらに、「夢を実現するには高い目標を立てると挫折し失敗するため、達成できる目標を立てそのマニュアルを作ることが重要」と説いた。

最後に、「自分を知り挫折しないスピード感を掴み、自分流の方法で将来の夢を実現してほしい」とエールを送った。



「中学生の頃の夢、希望が今につながっている」と話す片山代表

第2回 氷見市立西部中学校

6月3日(金)、林和夫氏(朝日建設㈱取締役社長)が氷見市立西部中学校において、2学年32名を前に、「学ぶこと、働くこと」と題して課外授業を行った。

林社長は、まずニュージーランド地震、東日本大地震による原発事故、昨日の内閣不信任決議案をめぐる鳩山前首相の嘘つき発言など世の中の様々な問題を取り上げ、これらの問題を解決するためには、いろいろ勉強をしてほしいと呼びかけた。

そして、英語の「哲学」という語源は「知ることを愛すること」と解説し、「より良く生きるためにより良く知る。知っていることだけではだめだが、まず知ることが大事なので、本を読んだりして勉強してほしい」と強調した。

また、「長所伸展法」で有名な経営コンサルタントの船井幸雄氏の言葉「伸びる人の3要素は素直、プラス発想、勉強好き」を引用し、「逆に考えると人の意見に耳を傾けもせず自分の意見を押し通す人、後ろ向きの考え方をする人、勉強嫌いな人が伸びるとは到底考えられない」と戒めた。

最後に、あるパン屋の「限界なき思考法」を紹介し、「自分はどういう考え方、気持ちを持っているか、必ずどうなるか」と訴えた。



「人間は一人では生きられない」と話す林社長

第3回 黒部市立宇奈月中学校

6月21日(火)、大橋聡司氏(大高建設㈱取締役社長)が母校の黒部市立宇奈月中学校において、2学年43名を前に、「今、何をすべきか。～『社会に学ぶ14歳の挑戦』に向けて～」と題して課外授業を行った。

大橋社長は、平成15年にオープンさせた巨大レストランが、数年後に閉店、事業からの撤退を余儀なくされた後、問題点を解決し、再チャレンジ精神を持って新たなレストラン経営を軌道に乗せることができた経験に触れ、「失敗を恐れずにチャレンジすること、失敗したら振り返ってその原因を考えることが大事で、それが成長することである」と力を込めた。

また、自社レストランの経営理念は、「存在感謝」と「分離礼」の徹底を大切にしていることであると述べ、「感謝することのできる人は将来

感謝される人になれる」と諭すとともに、「『14歳の挑戦』ではまず挨拶を大事にしてほしい」と呼び掛けた。

最後に、イチロー選手が小学6年生の時に書いた作文「将来の夢」を引用し、夢を実現しようという強い願望を持って苦しい練習を乗り越え、夢を達成することができた彼の人生を紹介し、『14歳の挑戦』を通して将来の夢がより具体的、現実的なものになり、それに向かって頑張っていこうという契機になるよう、是非頑張してほしいと母校の生徒にエールを送って講演を締めくくった。



「意欲を持って様々なことにチャレンジしよう」と語りかける大橋社長

第4回 滑川市立滑川中学校

7月15日(金)、鮎久晴氏（コーセル㈱取締役会長）が滑川市立滑川中学校において、全学年667名を前に、「夢」と題して課外授業を行った。

鮎会長は、まず、「友達のいいところを本当に見ていますか？」と生徒たちに投げかけ、「欠点は結構見えるもの。是非友達のいいところを見つけ合う努力をしてほしい。他人の長所に敬意を払うことができる人は、将来社会に出たら成功できる」と訴えた。

また、「夢は年とともに小さくなっていくので、大きな夢をもってほしい。そして知識を吸収し、どんな人の役に立てるかを決めることが大切。人間が生きていくために必要なことは誰かのために役に立っているかということである」と力

説した。

さらに、「新聞を読みニュースを見ることで、世の中の動きに敏感になってほしい。人生で学ぶということは、特定の教科や分野のみではなく、より多くのことに興味を持ち、いろんな分野を幅広く勉強することが肝要である」と諭した。

最後に、「夢を持つことが生きていくための原動力になる。夢を持ってそれに向かって努力する生き方は素晴らしい。周りの人に感動を与える人生にしてほしい」と熱く語り講演を締めくくった。



本を読み、活字を拾うことに慣れてほしいと語る鮎会長

第5回 黒部市立高志野中学校

9月30日(金)、本川祐治郎氏（㈱ブランドットコム代表取締役・経営士・ファシリテーター）が黒部市立高志野中学校において、3日後に控えた「社会に学ぶ14歳の挑戦」に向け、2学年73名を前に、「働くことの意義と心構え」と題して課外授業を行った。

本川氏はまず、挨拶を生徒たちに実践させた上で、「言葉と動作を分けて行う挨拶が最上級である。あかるく、いつでも、さきに、つづけることが大切である」と諭した。

そして、14歳の挑戦では、「①積極的な仕事の心がけ、②常に仕事の意味を考えながら判断し動作する、③仲間を認め合い、感謝し励まし合うという3つの姿勢を忘れずにチャレンジすればきっとうまくいく」と強調した。

また、メラビアンの方則によれば第一印象を決める要素として、言葉7%、表情・身だしな

み55%、声・口調38%であるとし、「笑顔の表情や真剣に伝えようとする気持ちがお客様に通じるので、意識して自信をもって仕事に臨んでほしい」と励ました。

さらに、「人は何故働くのか」を生徒たちに投げかけ、「仕事は自己実現の場所であり、自己実現は自分の得意分野を磨いて社会に貢献すること。働くことを通じて人間の器が大きくなる。

4日目から誰かの役に立とうという気持ちを意識して他人に貢献してほしい」と語った。

最後に、「成長ができる1週間を有意義に過ごされるよう心から願っている」とエールを送って講演を締めくくった。



人と接するには相手の存在を認めることに尽きると語る本川代表

第6回 富山市立和合中学校

11月9日(木)、新田八朗氏（日本海ガス㈱取締役社長）が富山市立和合中学校において、全学年370名を前に、「人生は一生勉強である」と題して課外授業を行った。

新田社長はまず、村上龍の著書『13歳のハローワーク』では世の中に514種類もの様々な職業があることを紹介し、人生は決して一本道ではなく、選択肢が無限でいろいろな可能性を秘めていると述べた。

また、サッカー元日本代表の中田英寿がイタリアのサッカーチームへ移籍した際の言葉「世界の中で自分の位置を確かめたい」を紹介し、「受験や試験とは自分の立っている位置を確かめるもの。決して競争ではない。受験勉強が辛

く嫌だと思ったら、将来の楽しいことを想像して前向きに考えてほしい」と激励した。

そして、高校受験で失敗することもあるが、「大切なことは原因を分析、反省し、くじけずに立て直して次の課題に挑んでいくこと」と力説した。

最後に、「将来、人生の津波や地震に耐えられるよう、今のうちにしっかり基礎固めをしておこう。そして一生勉強していこう。可能性のある皆さんが羨ましい。大いに活躍してほしい」と呼び掛けた。



「仲間たちとの縁を一生の宝にしてほしい」と訴える新田社長

第7回 富山県立水橋高等学校

11月22日(火)、山野昌道氏（㈱スカイインテック取締役社長）が富山県立水橋高等学校において、1学年160名を前に、「人生を楽しむ3つのコツ」と題して課外授業を行った。

山野社長は「なぜ働かなければいけないのか？」を4択で生徒に問いかけた。【①自分を成長させるため／②自分の夢をかなえるため／③社会に奉仕するため／④ごはんを食べるため（生きるため）】ほとんどの生徒が④と回答したことに「とても良い考え。働くことは社会の役割分担であり、原始時代から、狩りをする人、弓や土器を作る人などが役割を果たし、社会が発展してきた。何もしない人は肉を貰えない」と、働く意義を社会の原点に立ち返って解説した。

た。

さらに「社会は皆でつくるもの。働くことで社会の一員になるために、今勉強している」と、学ぶことの大切さを訴えた。

また、幸せになるための3つのコツとして、①迷ったら、やる、②人のせいにならない、③何をやってもうまくいく（ポジティブ・シンキング）を挙げ、「人生で選択に迷った時、どちらが正解だったのかは一生分からない。自分が選んだほうを、一生懸命正解にしていこう」とエールを送った。



なぜ働くのかを問いかける
山野社長

第8回 富山国際大学付属高等学校

12月10日(土)、若林啓介氏（㈱若林商店取締役社長）が私立富山国際大学付属高等学校において、1・2学年100名を前に、「Lessons I Have Learned (私が学んだこと)」と題して、課外授業講師派遣制度が始まって以来、初めての英語による課外授業を行った。

若林社長は冒頭、高校時代の米国留学や三井物産勤務時代に駐在したドイツでの経験を語った。そして、同社の社長に就任以来、ロータリークラブの活動を通して、発展途上国における学校建設や保健衛生向上活動に携わってきた経緯を紹介した。

若林社長はこれまで海外66カ国を訪れており、「国によって異なる文化や価値観があり、偏見を持たずにありのままを受け入れることが大切

である」と説いた。

そして、「当たり前のことを知らない不幸せ」（幸運は失うまで気づかない）を挙げ、海外では救急車を呼ぶと使用料が掛かることなどを紹介し、日本は恵まれた国であると強調した。

締めくくりに、“Japan's future depends on you.”（日本の未来はあなたたちにかかっている）の言葉を生徒たちに送り、「グローバル化の時代に対応するためには、英語を学んでおく必要がある」と強く呼び掛けた。



「日本は恵まれていることに気づいていない」と指摘する若林社長

第9回 富山県立富山南高等学校

12月10日(土)、谷中康弘氏（㈱神戸製鋼所北陸支店長）が富山県立富山南高等学校において、1学年200名を前に、「今に『ベスト』を」と題して課外授業を行った。

谷中支店長は最初に、「これまでの自分の人生の中で一番楽しく充実していたのは高校2年生の時であり、皆さんはこれからその時期を迎えていく。しかし、一番苦しくイヤな思いをしたのが高校3年生の時だった。つらい時期にも目標をしっかりと持ってがんばって欲しい」と語った。

また、「社会に出ると自分に向いた仕事ができる機会は少なく、与えられた仕事に自分を合わせていかなければならない。体を鍛えるのが運動、頭を鍛えるのが勉強、心を鍛えるのが友人関係である。バランス良く学んで選択の幅を広く持って欲しい」と力説した。

さらに、「受験勉強は大変だが大学に合格する

ためだけではなく、社会に出た時に会う様々な試練に耐える力を付けるためにも必要なもの。しっかりと粘り強く続けて欲しい」と諭した。

そして、人生において常に心がけて欲しいポイントとして「今できることにベストを尽くす。過去のことは悔やんでも仕方がないし、将来のことは分からない」「やるべきかどうか迷ったらやる。やって失敗したらあきらめもつくし、次の反省材料になる。やらなくて失敗したらやっておけば良かったとの後悔だけが残る」「良くないことはすぐに報告する。失敗はあり得るが隠しておくことが一番の問題」の3点を挙げ講演を締めくくった。



試練を乗り越えてこそ人は成長すると力説する谷中支店長

第10回 富山県立呉羽高等学校

12月12日(月)、中尾哲雄氏（㈱インテック取締役会長）が富山県立呉羽高等学校において、1学年190名を前に、「君たちの未来」と題して課外授業を行った。

中尾会長は、国際化、グローバル化の波の中において、これからは世界情勢を理解しながら世界を動き回って働く、国内に存在する国際人が必要であるとし、「英語などの外国語を是非、勉強してほしい」と力を込めた。

そして、高校時代に教わった数学の先生へ宛てた直筆の弔辞を紹介した上で、「世の中の定型的な弔辞では自らの弔意の気持ちが伝わらないことを考えてほしい」と諭した。

また、「将来どんな職業に就くにしても、何よりきちんとした一定の学力を身に付け、外国語が話せ、健康な体づくりが不可欠である」と生徒に呼び掛けた。

さらに、「自分のもっている価値を社会に試す、問う姿勢がなければ人生の喜びが得られない。単なる机上の勉強ばかりではなく、スポーツや芸術等を通じた感動や感激の積み重ねによって、自分の価値が高まっていくことを肝に銘じていけば、立派な社会人として生きていける」と説いた。

最後に、「自分が生きていくには、『豊かな心』と『優しさ』を持ち、『基本的な学力』を身に付けることが大事。諸君が、大きく変わりゆく世界の中で立派に生きていくことを心からお祈りをする」と期待を寄せ講演を締めくくった。



「夢は人を輝かせ 希望は人を大きくする」と励ます中尾会長

第11回 滑川市立早月中学校

1月27日(金)、中尾哲雄氏（㈱インテック取締役会長）が滑川市立早月中学校において、全学年359名を前に、「ありがとう」と題して課外授業を行った。

中尾会長は、自身が一日に5通の手紙を書き、お世話になった方々に対してお礼をしていることに触れ、「我々は日頃いろいろな方からお世話になっていることに気付いていない。お礼には様々な仕方があるが、社会人として社会の役に立つこともその一つである」と諭した。

そして、自社の新入社員研修会の席で、社員から両親に対してお礼の手紙を書かせていることを紹介した上で、「メールは便利だが、人と対話しコミュニケーションしていく能力を失っていく。時には、ペンをもって文字を書き、交流してほしい」と語り掛けた。

また、小学生の頃、川原に忘れた野球の赤バ

ットを必死で見つけ出した時の感動の思い出を振り返り、「様々な感動、感激が積み重なって初めて人生が豊かになる。だから、読書、音楽、映画、友情を通じて感動、感激を積み重ねてほしい」と強調した。

さらに、高校3年生のとき、英語の先生からの指導やことばの思い出を心の支えとして生きているとし、「先生を尊敬し、感謝することが大事である」と生徒たちに呼び掛けた。

最後に、「今日のような若い皆さんにお話しできる機会を与えていただき大変『ありがとう』と述べ、講演を締めくくった。



「自分の心の根っこを早月中にもってほしい」と語る中尾会長

第12回 富山大学人間発達科学部附属小学校

2月15日(水)、牧田和樹氏（㈱牧田組取締役社長）が富山大学人間発達科学部附属小学校において、5・6学年159名を前に、「よりよく生きる」と題して課外授業を行った。

牧田社長は冒頭、昨日のバレンタインデーにちなんで、チョコレートをあげた人、もらった人、そして双方をそれぞれ見ていた人、4人の場面設定を例に挙げ、各々の立場になったときの気持ちを真剣に考えてみよう、と児童たちに問いかけた。その上で、「4人は各々の立場で考えていることを是非分かかってほしい。他人には自分と同じように気持ち・心があることを理解してほしい」と語り掛けた。

また、「人は決して一人では生きていけない、自分以外の人と関って生きていかなければならない。人間社会とは人と人との間を大事にする

ことである。自分以外の相手の気持ちを考えてあげることが一番大事である」と強調した。

さらに、自身が全国の商工会議所の中で最年少の会頭に就いたのは、早くから常に相手のことを考えるよう心がけてきた結果、周囲が押し上げてくれたエピソードを紹介し、「今日を境に、相手のことを考えるように努めてほしい」と呼び掛けた。児童たちは牧田社長の経験談を自らの生き方に生かそうと、真剣な表情で聞いていた。

最後に、「人間社会は人と人との間が重要であることが理解できれば、今よりも『よりよく生きる』ことができる。素敵な人生を送ってほしい」とエールを送り、「学校や家でも相手の気持ちを考えてみよう」と語る牧田社長



第13回 黒部市立生地小学校

2月29日(水)、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)が黒部市立生地小学校において、6年生33名を前に、「夢をもつこと」と題して課外授業を行った。

大橋社長はまず、児童たちに「メジャーリーグのイチロー選手が米国で大活躍できた理由は何でしょう」と問いかけた。そして、イチロー選手が小学5年生の時に書いた夢をテーマとした作文を引用。小学3年生から1年365日のうち360日激しい練習に励み、超一流の野球選手になる夢を実現したエピソードを紹介し、「①強い夢・願望をもっていたこと、②小さい頃から苦しい練習を乗り越え努力したことが夢を実現するための大きな要因である」と述べた。

そして、「これはイチロー選手に限らず、世界で成功した人たちが皆に共通している。ある日突然、超一流選手になれる訳ではなく、ちょっとした日々の努力の積み重ねが唯一の道である」

と諭した。その上で、「自分は今何が好きかを考え、いろんなことに取り組むなかで、自分の好きなことを見つけていくことが大事である」と語り掛けた。

さらに、自身の夢についても触れ、「人を育てたい」という夢を掲げ、7年前に飲食店を創業し、若い従業員をしっかりと教育し、世に送り出す社会貢献ができ、夢を実現できた体験談を紹介した。

最後に、「皆さんには無限の可能性がある。まずは夢をもってほしい。自分の好きなことを見つけ、夢に向かって着実に歩んでいてもらいたい」と児童たちにエールを送った。



「仕事をすることは楽しく、やりがいがある」と語る大橋社長

第14回 富山市立岩瀬小学校

3月1日(木)、中尾哲雄氏(株インテック取締役会長)が富山市立岩瀬小学校において、同校創校139周年記念行事の記念講演として、全学年164名を前に、「ありがとう」と題して課外授業を行った。

冒頭、中尾会長は「139年の歴史があり、富山に初めて電気が灯いた1899年以前から続く伝統のある学校で学べることはとても幸せなこと。皆さんは誇りをもってほしい」と呼び掛けた。

そして、終戦直前に魚津へ疎開する途中の犀潟駅で見知らぬ近所の女性からおにぎりをもらったが、その女性に十分な御礼が言えなかった思い出を紹介した上で、「ありがとう」をその都度言わなければならないと児童たちに諭した。

また、自身が子どもの頃の夢は、外交官、先生、経営者、小説家であり、夢を追い続ける自

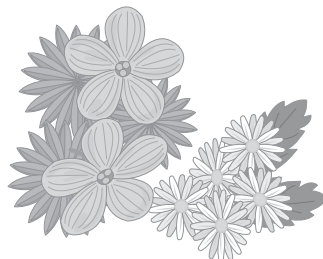
らの半生を紹介し、「夢は叶わなくても、もつことが大事である」と強調した。

さらに、「たくさんお世話になっていることを忘れず、勉強、スポーツ、読書、友人を大事にして頑張ってもらいたい。ただし、同級生へのいじめや悪口を言うことで、自分の心が少しずつ腐っていくことを忘れないでほしい。皆さんが元気に成長されることを祈っている」と語った。

最後に、全校児童と教職員から感謝の気持ちを込めて、「ふるさと」の歌がプレゼントされ、中尾会長と一緒に合唱して課外授業を締めくくった。



「皆さんはこれから輝いていかなければならない」と語る中尾会長



教員対象の講演

小中学校長研修会で大いに語る

4月11日(月)に富山・高岡の2会場で開催された県内公立小・中学校長研修会において、企業経営者による講話が企画され、松波孝之氏（株ケーブルテレビ富山取締役社長）と前田圭一氏（前田薬品工業㈱代表取締役）がそれぞれ講師に招かれた。

松波社長は、水橋ふるさと会館において、東部教育事務所管内の校長ら約190名を前に「持続可能社会の実現に向けて」と題して講演。

まず、持続可能な社会とは①環境・経済・社会の3分野が調和し、②世代間の公平（子供たちの世代に同じものを残す）と③世代内の公平（世界に生きるすべての人々が公平）が実現できる社会であると説明。地球温暖化について、今後世界の平均気温が上昇していくことは間違いなく、その平均気温を2～3℃の上昇で安定化させる（＝持続可能な社会を実現させる）には今後20～30年の温室効果ガス削減努力と投資が大きな影響を持つと語った。

また、環境省が作成した「地球温暖化対策に係る中長期ロードマップ」の中でCO₂削減の方策のひとつとして原子力発電所を8期新增設し、稼働率を60%から最大88%にすることが挙げられているが、今回の福島原発のような事故は絶

対にあってはならず、事故防止の技術向上により問題を克服しつつ実現しなければならないと力説した。

そして地域の取組みとして、環境モデル都市に認定されている富山市のコンパクトシティ政策や当会の打ち水、ドングリ集めなどの実例を紹介。また、ユネスコの活動として世界寺子屋運動、世界遺産活動や青少年の育成等を説明した後、むすびとして「未来を決めるのが現在の我々であるという認識」（一人ひとりが担い手の意識を持つ）「学びを通じて考え行動につなげる」（シンクグローバリ、アクトローカリー）が大切であると強調して講演を締めくくった。



前田代表は、ふくおか総合文化センターにおいて、西部教育事務所管内の校長ら約160名を前に「強い日本人を育てましょう！」と題して講演。前田代表は、日本の国際競争力が低下している現状についてデータを交えながら説明し、平成不況期以降を「失われた20年」と称し、この間、政治、経済や外交分野などで脆弱化が進行した日本をもう一度立て直さなければならないと力を込めた。

また、OECDの「生徒の学習到達度調査（2009年）」結果では、日本はアジア勢との比較で下位にあることに警戒感を示し、立て直していく必要があるとした。

その上で、閉塞感の時代から脱却するためのキーワードは、「経済」と「教育」の復興であると指摘。低下した学力や心の部分を立て直すため、教育をもう一度見直す必要があるとし、今

後は国、行政、学校、家庭、地域や企業が一体化して、強い日本をつくりあげていくことが大変重要であると訴えた。そして、将来の日本を担う少年少女たちを「強い日本人」へと導くため、「強い教師」を育ててほしいと校長先生にエールを送った。

最後に、教える側、教わる側の双方が「自分は世のため人のために何ができるか」を常に肝に据えてほしいと主張した。これからは、こうしたことを教えられる教師を育成し、5年後、10年後に強い日本人が社会に出て、強い日本人が強い日本を育てていくことを切に願いたいと強調して講演を締めくくった。



逞しい人材の育成が急務 ―高見教育問題委員長が富山市小学校教務主任会で講演―

7月7日(木)に富山市立速星公民館で開催された「平成23年度富山市小学校教務主任会」において、高見貞徳氏(㈱アイベック㈱取締役会長)が「小学校教育担当の先生方へ」と題して、富山市内の小学校教務主任76名を対象に講演した。

高見会長は、まず、福島第一原発事故のメルトダウンを例に、「日本全体が自力で立ち上がろうとする気概が見えないことが一番の心配事である。2つ目のメルトダウンとして日本人の心が溶けつつある」と憂いた。

そして、小学校教員に期待することは、①基本理念「教育は国家の礎なり」を確認すること、②未来ある子どもたちを育成したいという「熱い心」を持つこと、③教育する子どもたちを「自分自身と入れ替えて」考えることであると、教員にエールを送った。

さらに、去る6月に国際通貨基金(IMF)が日本に対して消費税を段階的に引き上げるよう要請したことを例に、日本は自国の政策すら決定できない現状に触れ、決断・実行できず、責任をとらない風潮が日本中に蔓延していると嘆き、「多くの国民に人間力が不足している。逞しさを備えた人材育成が必要である」と熱く語り掛けた。

最後に、「アメリカ50番目のハワイ州に次ぐ51番目の「日本州」にならないよう、皆さん、自信を持って我が国を守りましょう」と強調して、講演を締めくくった。



立派な日本人をつくっていかう ―四十物氏が東海・北陸教頭会研究大会で力説―

9月27日(火)、東海北陸7県の公立小・中学校の教頭らが集まり研究成果を発表する「第39回東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会」が富山市で開催された。会場のオーバードホールに教員1,300名が集まる中、当会教育問題委員会前副委員長の四十物直之氏(㈱四十物昆布取締役社長)が「先人・先輩に学ぶ」と題して記念講演を行った。

四十物社長は、郷土の先人である瀬島龍三の「教育の目的とは、立派な人、立派な日本人、立派な国際人をつくることである」という言葉を紹介。昆布の生産地である北方領土近海で今も続くロシアとの領土問題について自らの体験を交えながら語るとともに、近年の歴史教科書問題にも触れ、「教育を通じて、日本の歴史と文化を誇りに思い、相手の国を理解し、世界で活

躍する日本人を育てて欲しい」と強調した。

また、「良いと思うことは小さくても必ずやれ、悪いと思うことは小さくても絶対やるな」という安田善次郎の言に触れ、『お天道様が見ている』といった日本人の倫理観、良い慣習を伝えていかうと訴えた。

さらに、自身が郷里で家業を継いで間もない頃、懇意の先輩宅を十数年振りに訪ねた折に、「出直して来い!」と理由も告げず一喝されて追い払われ、再訪時に商売人としての心得を優しく説いて頂いたエピソードを紹介し、指導者の務めとして、真に相手の成長を願った厳しく温かい指導を求めた。



子どもたちは果敢に困難に挑戦してほしい ―大橋前教育問題委員長が指導主事等研修会で講演―

1月27日(金)に県総合教育センターで開催された「平成23年度第16回指導主事等研修会」において、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)が「企業が学校教育に望むこと」と題して、県東部・西部教育事務所の指導主事ら約70名を対象に講演した。

大橋社長は冒頭、建設業の新分野進出として始めた巨大レストラン事業が撤退を余儀なくされたものの、再チャレンジ精神をもって新たなレストラン経営を軌道に乗せた事例や、累積赤字を抱えていた第三セクター会社の社長を引き継ぎ、再建を使命に自ら範を示しながら社員一丸となって経営に取り組んでいる事例等を紹介した。

そして、これらは「できないこと」に対して、人々の地域への情熱が上手くコーディネートされ、実現する事例であるとした。その上で、「事業、まちづくりには思いが大事で、思いがあってはじめて計画が立案され成果に結びつく。しかし、青少年意識調査結果をみると、日本の今の子どもたちは諸外国に比べ、『やりたいことに

困難があっても挑戦したい』と考える比率が低い。人は挑戦する意欲を失ったら日本の発展は得られない。子どもたちが困難に果敢に挑戦する姿勢が望まれるし、そうでないと日本経済、国の発展はない」と強調した。

また、教育問題委員会の活動内容として、過去3回の海外教育事情視察の実情を紹介するとともに、昨年度末発表した提言などについて詳しく丁寧に説明した。その中で、「我々民間企業からみると、学校はまだ閉鎖的であるように感じる。地域も企業も学校を応援しようという思いが強いので、学校は積極的に情報開示し、応援を受け入れていくことが必要である」と助言した。

最後に、「富山経済同友会は今後も学校と教師の応援団であり続けていきたい」と力強く語り、講演を締めくくった。



お客様目線で「心に寄り添った」行動を！ ―高木代表幹事が県警スキルアップ研修にて講演―



2月23日(木)に富山県警察本部で開催されたスキルアップ研修において、高木繁雄代表幹事が「グローバル化する地方経済と防犯活動と連携したCS」と題して県警の幹部職員約120名を対象に講演した。

高木代表幹事はまず第1部として欧米や日本の経済状況について解説。ギリシャを主としたヨーロッパにおける経済危機の長期化や、アメリカにおけるサブプライム問題も収束しない中、貿易立国である日本の先行きに明るい兆しはなかなか見えてこない、と語った。

続く第2部では北陸銀行の防犯とCS(顧客満

足)活動について説明。防犯上の隙が無い店はお客様サービスが良く、明るく元気で活力のある店であると語り、来店客への笑顔の声かけや迅速な用件確認の徹底がCS向上だけではなく、犯罪の発生防止にもなっている、と強調した。

講演終了後には積極的に質問が挙がり、「警察も地域住民の皆さんのためのサービス業であると考えたい。そのためにどのような対策が必要か？」との問に対しては、「よい事をどんどん褒めてオープンにし、一所懸命やっていることをPRする機会を作るべき」と回答した。

